

合唱作品における言葉と音楽の関係
～三善晃の作品を通して～

山 下 敬 子

On the Relationship between Music and Words of the Chorus Works
~Through the Akira Miyoshi's works~

Keiko Yamashita

Various factors are seen in the expanse of creation and the performance of the current chorus musical work. It is holding of NHK and other various contests.

Contest start original about 1960 had many short pieces such as foreign music, (Mozart, Schubert, Brahms), but when the 1970s begins, the situation changes completely and there are many works which a Japanese composed and comes to be sung. Particularly, Saburo Takada, Yoshinao Nakata, Akira Yuyama, the work of Akira Miyoshi and others were taken up willingly. In addition, a work of Teruaki Suzuki equal to the pupil of Tokuhide Niimi, Makiko Kinoshita, Midori Takashima and Akira Miyoshi becomes the record-breaking boom afterwards when it is the 1980s. Unbroken descent from "chorus music" creation to continue without a break at the present is formed, and the genealogy of such a composer will bring about the work group which is still enjoyed singing today. Hideki Chihara, Ko Matsushita, Takatomi Nobunaga composers such as the Takashi Nobunaga wealth appear now. Since there is acceptance in the society including a work rooting in the climate again in the time, it will be that the work is born in various form in future. I have a big influence on development of the chorus music and consider a work of Akira Miyoshi who continued contributing through poetry.

キーワード

合唱 Chorus, 三善 晃 Akira Miyoshi, 詩 Poetry, 言葉 Creation, メッセージ Message

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

I. はじめに

小学校では児童合唱団に入り、中学、高校でも合唱部で歌い、大学では声楽を学ぶことで、歌うことの難しさを改めて感じた。声を発する楽器でもある声帯とは何か、またどうしたら美しい歌声を作り出せるのかということから始まり、学んでいくうちに言葉と音楽の関係はかなり密接であることも分かってきた。声を美しく響かせるためにはかなりの長いスパンで、技術習得のための訓練をすることになるのだが、言葉で伝える音楽には何よりも言葉のメッセージ

性が重要である。言葉は日常生活において、誰もが使いまわすことが出来る。だがそれが詩として使われると、かなり深い意味が含まれ、読むほどに深まっていくものが多い。合唱曲はワンフレーズ毎に重層的に作られているので、大勢の声から違う時間が同時に流れていることにより、聴く側にも多層的なイメージが伝わるのではないだろうか。これは合唱曲の魅力になっていると思われる。

三善晃はコンクールなどでも人気の高い作曲家の一人で、全国のレベルの高い小、中、高校、大学、また一般合唱団でもその作品は数多く取

り上げられている。合唱作品は多く、その響きの美しさは素晴らしく、そこには祈りがあり、願いがあり、思いが詰まっている。しかし2013年10月に惜しまれつつ80歳の生涯を閉じた。そんな三善晃の作品に強く惹かれる思いから、全国では「三善晃作品を歌う会」などというものも立ち上がったようだ。幸いなことに昨年、私の大学の合唱授業にて、この三善晃作曲混声合唱組曲「木とともに人とともに」の作品を取り上げることになり、定期演奏会で発表することが出来た。合唱経験の浅い学生も多い中ではあるが、この作品に学生とともに向き合えた喜びは私自身大きかった。因みに、作詩は谷川俊太郎である。三善晃の合唱曲の作曲に際し、どのような詩を選び、どんな思いで作られたのか、その詩の発する言葉のメッセージ性を音に乗せ、生まれ出た作品の数々に触れ、合唱作品の詩と音楽の関連性を考察する。

II. 三善晃の経歴と作風

1933年、東京に4人兄弟の次男として生まれる。4歳より平井康三郎に作曲を師事し、本格的に作曲とヴァイオリンを学び始める。8歳で太平洋戦争が始まる。小学校6年の時、疎開先での半年間に歌を2曲書く。東京大学文学部仏文科在学中22歳の時に、フランス政府給費学生として1955年から1958年にかけてパリ国立高等音楽院に留学、24歳で帰国後、東大仏文科に復学する。フランス留学中には、先にパリ音楽院に留学していた矢代秋雄と親交を深め、互いに影響を与えあった。矢代と同じように、三善の作品も古典的な佇まいを見せる。しかし、矢代の、蒸留に蒸留を重ね、選び抜かれた完成度の高い作風と比較して、三善の場合は、内側から湧き出た結果として、すでに古典的な構成があるように思われる。

活動初期においては、「ヴァイオリンソナタ」(1954)や「ピアノソナタ」(1958)といった「ソナタ」志向の作品を書いた。しかし三善はパリ留学を機に「ソナタ」と、自身の感性の決定的な違いを感じ、次第に「ソナタ」から離れていく。28歳で萩原朔太郎の詩で初めての合唱曲「トルスⅡ」(1961)を書く。1960年代の合唱作品の特徴として、自由な調性の維持、表現の多様化(言葉の語り)などが考えられるが、これは声を通じた言葉の音響化の一環と思われる。

三善は、言葉が本来持つ発音やイントネーションに合わせた旋律付けで音声としての言葉を残そうとするのではなく、言葉を伝えるためにテキストの解釈を表現しようとしている。70年代以降、合唱を用いた大作が次々と発表されていく。

三善作品は、純粹で、自分自身の感性に従い、ヨーロッパのアカデミックな音楽であるということ、戦争体験による死生観が主となる思想の表出されているものが多く有る。創作時期によってスタイルは異なるも、壮快で鋭いリズム、冷酷さから詩的な情緒が漂う優美さを想起させる幅広い和声、一聴して判別できないほどの緻密な動機の展開が特徴的と思われる。1970年に作曲された「王孫不帰」男声合唱曲においては、その書法が歴然と変化しており、西洋音楽理論を基本に置きながらも、能楽の影響が顕著である。幼少時から母親の影響で、家の中で耳にしていながらもなじめなかった、謡いの拍節や律法が、三好達治の詩句にふさわしいものに思われ、声部の横の動向に取り入れた、と自身の言葉で言っている。フランス留学を経て「ソナタ」に代表される西欧音楽の方法論に違和感を抱くようになった三善の、日本伝統芸能に対する考えとして興味深い。それと同時に「王孫不帰」は「レクイエム」へと続く、反戦を主題とした作品であることを付記しておく。「レクイエム」では、オーケストラと合唱の両者が重要であり、合唱は言葉の伝達に重きが置かれているのではなく、無声音などを多く使うことでその語気を強め、苦しみや心からの叫びを強調している。その後作曲された「変化嘆詠」も「弔い」をテーマとしたもので、言葉も音も「王孫不帰」の系列で、三善自身が、「不帰」の人への気持ちを表すには、やはりこうした「言葉」と「謡」のような表現が必要だったと思われる。

III. 三善晃の詩への思い

三善は、『詩が現実を離れた次元から、現実を見下ろし、その言葉は「言の葉」であって、その葉が茂る幹のような「言」が私たちの内部に密かに脈打っているのではないか。人はものを指し示す「言葉」を覚え、次にはその「言葉」でものを知るようになる。そのために、ものと私たちの関係はしなやかさを失い、抜き差しならなくなり、固定されてしまっていないだろうか！言葉は一つ一つではなくて、それが組み込

まれた文になり行になる。言葉を入れ替えたりすれば行も変わる。ある意味、「半ば自分であり、半ば相手の詩人である」というような関係が、詩との間にできる。また詩が歌となったとき、歌の部分は完全に歌の「波」を作る。語る部分は語りのうねりで作らなければならない。歌には旋律やハーモニーという、それ自体、直接、人の心に触れるものがあるので、それを使って届けるのは少し押しつけではないか…だからこそ「語るだけ」にする、ピアノだけにするとか…。言葉の持つ意味内容というより、音律、あるいはフィギュアに含まれるカデンツが聴こえる。子供の頃から、自分の中に感じていた言葉のカデンツに、情感を添えるという思いである。』と述べている。

三善はフランスに留学した際に、フランス語という言葉と音について日本語との関わりを考えてみた。『萩原朔太郎』の詩でラヴェルの歌曲「博物誌」に作曲をし、音解きを試みた。日本語とフランス語（欧米語）の言語の相違点が「壁」となり、あらゆる面での違いが浮かび上がってくる。その壁を乗り越えて、あまねく、人々に伝わっていくような「音」が、果たしてあるのかどうかを模索していた。

IV. 日本と欧米（フランス）の相違点

人間を支えるそれぞれの風土、市民社会、政治、宗教は、音楽の幅と奥行きが物語る。三善にとって、その違いは作品を通して、自分を自分として証明し、またこの時代に生きていることの意味を納得させるだけの理由、宿命的な思いの表出でもあった。

言語を除き、その違いを比較してみた。

(表1)

	日 本	欧米（フランス）
宗 教	あいまいな神の存在	絶対的な神の存在
自然音	河原や屋根伝いに聞こえる風の音	西欧の建物の中を吹き抜ける風の音
表 現	沈黙は無限の可能性とする。「所作」が重んじられる。	主体的に自分を表現する。「言語」で伝える。
美 術	空白のところを何かを読み込む作業。「無」の意味	空白を残さず埋める作業

顔 料	植物性で時空の流れの中での変化が前提。時間の変化の中での美	鉱物性で永遠不変
-----	-------------------------------	----------

V. 1960年代 主な合唱作品

日本の音楽界は欧米と同時進行的に発展する時代となり、この頃には日本の合唱界においても、アマチュアの合唱活動が非常に盛んとなり、自分たちの歌いたい曲を、自分たちの現場から生んでいこうとし、その熱意が作曲家を触発することにもなり、沢山の作品が生まれ出て、我々の共有するところとなった。

(表2)

作曲年	編成	作品名	作詩者
1961	混声	トルスⅡ	萩原朔太郎
1962	女声	三つの叙情	立原道造
1962	混声	嫁ぐ娘に	高田敏子
1963	女声	麦藁帽子	立原道造
1963	男声	三つの時刻	丸山薫
1965	女声	月夜三唱	中原中也
1968	混声	四季に	福田万里子
1968	混声	五つの童画	高田敏子
1969	混声	道	伊藤海彦

1961年、三善が最初に書いた合唱曲「トルスⅡ」では萩原朔太郎の「月に吠える」から2篇の言葉を使った。器楽とコーラスが終始、別な目的に向い、互いに影の方向へ引き込む様な陰湿な歴史の中にありながらも、密かなきらめきの光があった。翌年の「三つの叙情」は初めて書いた女声合唱曲であったが、抒情的で女性の波動のようなものがそのまま、詩の響きとなって共鳴している。音楽が個々の言葉に先行している点は特異である。

またその同年に書いた「嫁ぐ娘に」では、詩人高田敏子さんの嫁がれる娘さんの幸せを願って書かれた言葉に語りかけるように、一人の人間としての祈りがあった。その翌年には初めての男声合唱曲「三つの時刻」を書いた。三善自身が持つ男声のイメージが、抑制された感情の中で響くようであったために苦心されたようだが、その孤独感から丸山薫の詩が導き出してく

れたと言う。1968年「五つの動画」では半音階や不協和音を使い言葉を畳み掛けるように叫ぶところもあり、合唱作品における日本語表現の新たな面が見える。ピアノパートが打楽器的に無調で書かれるなどピアノと合唱が交互に演奏展開し、静寂な音楽に緊張感が加わってくる。

また、三善の作品には子供に即し、子供の目で風景を見、1963年「小さな目」や1965年「子どもの季節」など、各詩語のイメージや子どもの心象に楽句が密着して作られた作品も多くあり、楽想の飛躍や転換をはかった。

VI. 1970年代 主な合唱作品

60年代後半から70年代にかけては、アフリカの飢饉などが広く世の中に知れ渡り、社会全体が非常に暗鬱とした空気に覆われていた。死者への思いを歌ったものが多く、音の巡礼の時代とも言われた。

(表3)

作曲年	編成	作品名	作詩者
1970	混声	王孫不帰	三好達治
1971	女声	四つの秋の歌	高田敏子
1972	児童	オデコのこいつ	蓬萊泰三
1974	混声	三つの海の歌	小林純一
1976	男声	貝がらの歌	三善晃
1976	女声	狐のうた	会田綱雄
1977	混声	三つの沿海の歌	萩原朔太郎
1977	混声	クレーの絵本 第1週	谷川俊太郎
1978	児童	ふたりで	三善晃
1979	混声	風のとおりみち	谷川俊太郎

1970年中国の漢詩をもとに三好達治が書いた「王孫不帰」は謡いの拍節や律法が詩句にふさわしく、声部の横の動向に採り入れた。詩の音声だけが聞き取れる静寂の深所に、哀感の像を沈ませる。その像に、反戦や人間愛のモラルな感情が深く刻み込まれていることは、あえて言うまでもない。「王孫不帰」は1972年「オデコのこいつ」やオーケストラを伴った「レクイエム」と年代的に重なっている。「オデコのこいつ」はナイジェリアの内戦で子どもたちを含むおよそ200万人が餓死した、その悲惨さに目を

向けたもので、そのあとの1975年に作曲された「変化嘆詠」に続くものである。こういう生と死に向き合う状況の中で、三善自身の中にいわずゆる日本的、あるいは邦楽での「言葉」や「音」が大きく浮かび上がってきたのかもしれない。

VII. 1980年以降の主な合唱作品

(表4)

作曲年	編成	作品名	作詩者
1980	児童	光のとおりみち	谷川俊太郎
1980	男声	クレーの絵本 第2週	谷川俊太郎
1982	女声	街路灯	北岡淳子
1982	混声	地球へのバラード	谷川俊太郎
1982	児童	のら犬ドジ	蓬萊泰三 三善晃
1983	女声	五つの唄	北原白秋
1983	女声	わらべうた	谷川俊太郎
1983	女混	動物詩集	白石かずこ
1983	女声	あの日から	三善晃
1983	混声	知っているよね	三善晃
1984	混声	田園に死す	寺山修司
1984	児童	わりばしいっぼん	蓬萊泰三
1984	児童	響紋	宋左近
1985	児童	神さまへの手紙	谷川俊太郎
1985	男声	縄文土偶	宋左近
1985	女声	幸せは	村松英子
1985	女声	三つの夜想	村松英子
1986	男声	路標の歌	木島始
1987	混声	ぼく	三善晃
1987	混声	交聲詩 海	宋左近
1988	混声	五つの願い	三善晃
1989	混声	あなた	谷川俊太郎
1990	混声	縄文連禱	宋左近
1990	児童	朝の羽ばたき	木島始
1992	混声	あさくら讃歌	後藤明生
1992	男声	遊星ひとつ	木島始
1992	混声	それが涙と言うのなら	銀色夏生

1993	男声	だれもの探検	木島始
1993	混声	じゅうにつき	谷川俊太郎
1993	混声	緑のたそがれ	青木景子
1993	男声	へんしん	三善晃
1993	混声	愛の歌	谷川俊太郎
1994	混声	宇宙への手紙	谷川俊太郎
1994	児童	ふじさんはふじさん	三善晃
1994	混声	伝説	会田綱雄
1994	混声	五柳五酒	佐藤信
1996	女声	空を走っているのは	村松英子
1996	混声	一人は賑やか	茨木のり子
1996	女声	夜と罨	宋左近
1997	児童	あなたに	佐藤学
1997	児童	学校讃歌	佐藤学
1997	混声	詩の歌	まどみちお
1998	混声	やさしさは愛じゃない	谷川俊太郎
1999	混声	木とともに人とともに	谷川俊太郎
2000	混声	正しい歌のうたいかた	五味太郎
2000	混声	風	小高暢子
2001	混声	月と蜉蝣	稲垣瑞雄
2001	女声	風に、風から	新川和江
2001	混声	蜜蜂と鯨たちに捧げる譚歌	白石かずこ
2001	混声	月と蜉蝣	稲垣瑞雄
2001	混声	交聲詩曲 波	宋左近
2002	混声	三つのイメージ	谷川俊太郎
2002	女声	五つの詩曲	金子みすず
2003	混声	出会い	三善晃
2003	児童	葉っぱのフレディ	三善晃
2003	女声	虹とリンゴ	宋左近
2004	児童	ゆったて哀歌集	五木寛之
2006	混声	やわらかいいのち	谷川俊太郎
2007	混声	その日	谷川俊太郎

1970年代後半より詩人の谷川俊太郎の詩で多

くの合唱作品が様々なコンクールや、合唱祭などで演奏されることが目立つ傾向になっていた。そこで、三善作品における合唱曲の作品の数を詩人別に見てみる。ただし、未出版のものや、オーケストラに含まれる合唱曲、また、「組曲」以外の単独の曲に関しては含まれていない。

Ⅷ. 三善作品（合唱組曲）詩人別作品数

(表5)

作詩者	曲目数	%
●谷川俊太郎	16	20
◎三善晃	11	14
○宋左近	7	9
木島始	4	5
蓬萊泰三	3	5
高田敏子	3	3
白石かずこ	3	4
佐藤学	3	4
村松英子	2	4
会田綱雄	2	3
小林純一	2	3
立原道造	2	3
その他(19人)	25	23

出版されている主な組曲の作詩者を集計してみると、谷川俊太郎作詩が全体の20%を占めることになる。全日本合唱コンクールを始め、NHK 全国学校音楽コンクールなど様々な合唱演奏会において、かなり頻繁に演奏されている。

Ⅸ. 詩人 谷川俊太郎について

哲学者で法政大学総長の谷川徹三を父として、1931年 東京府東京市(現・東京都)杉並区に生まれ育つ。1948年から詩作および発表を始める。1950年には、父の知人であった三好達治の紹介によって『文学界』に「ネロ他五編」が掲載される。1952年には処女詩集『二十億光年の孤独』を刊行する。まもなく、詩作と並行して歌の作詞、脚本やエッセイの執筆、評論活動などを行うようになる。現在までに出版した

詩集・詩選集は80冊以上におよぶ。子どもが読んで楽しめるようなもの（『わらべうた』『ことばあそびうた』など）から、実験的なもの（『定義』『コココーラ・レッスン』など）まで幅広い作風を特徴としている。谷川の詩は英語、フランス語、ドイツ語、スロバキア語、デンマーク語、中国語、モンゴル語などに訳されており、世界中に読者を持っている。

谷川の詩の特徴はさわやかでリズム感があり1つ1つのセンテンスが比較的短くわかりやすい。日本を代表する詩人の1人、大岡信は、「じめじめしたところ、感傷的なところのまるでない、一種幾何学的な簡潔さ、無駄のなさという性質を持っている」と評している。このような点からも、現代の日本社会において、多くの人の心に響き、受け入れられる要素が大きいことが分かる。

また、三善は「クレーの絵 第1集」（1977）を作曲をした際に、『谷川さんのこの詩集は、詩の享受者としての私を惹きつけるばかりではなく、私の中に音の種を蒔き、育ててくれた。クレーの風景と谷川さんの眼が、私に遠近法を許してくれる、それが音構造の陰影につながったと思う。地表の背理や不合理、生の哀しみや痛みが地表への希いと生への愛であり、そこに、私が音を書きたかった理由がある。』と述べている。

また1982年には、「地球へのバラード」を発表した。この作品は東大柏葉会の、人間を含む生命の星として地球への愛を歌いたい、という願いから詩を谷川氏に委嘱し、そのうちの5作が三善により、2年の歳月をかけ温められ作曲された。無伴奏のホモフォニックに書かれたこれらの曲は、永遠に繋がる地球の祈りの重さとなり、歌い継がれていくことであろう。

昨年12月に、広島文化学園大学音楽学科定期演奏会で三善晃作曲／谷川俊太郎作詩の「生きる」を演奏発表した。これは、混声合唱組曲「木とともに人とともに」よりの3曲目である。この「生きる」はピアノの無窮連奏による混声合唱曲とされている。

この曲を作るきっかけが1999年最後の大晦日の日に、亡くなった友人たちを想いながらピアノを弾き続けていると、その音の流れの中に、谷川のこの詩の詩句が聞こえてきたという。「ここに謳われるこの世の風景を、彼岸の人々はもう見るができず、その彼岸を私たちはまだ見るができない。だが、死者と生者の

間を隔てているものは鏡のようなもので、この世の悼みと祈り、あの夜の記憶と安らぎが、この鏡の両面に手を合わせるように映っているのではないかと、三善は語っている。

筆者は詩と音楽の関係を考察する。

混声合唱組曲「木とともに人とともに」より「生きる」

谷川俊太郎 作詩 / 三善晃 作曲

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木漏れ日がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみをする
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ
それはアルプス
すべての美しいものに出会うということ
そして
かくされた悪を注意深くこぼむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまどこかで産声があがるということ
いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと

【考察】

詩の特徴

- ① すべて1センテンスが短くて、節尾が「こと」で占められている。韻を踏んでいて歯切れがよい。
- ② 5節からなる詩の最初がすべて「生きているということ いま生きているということ」で始まり、詩を理解しやすい。
 - 1節目は、無意識に起こる現象
 - 2節目は、好奇心
 - 3節目は、喜怒哀楽
 - 4節目は、世界中の様々な現象
 - 5節目は、生態共存

音楽の特徴

- ① ピアノの前奏部分の、遠くから聞こえてくるような音の流れが心地よいクッションとなり、「生きている」という言葉を引き出している。
- ② 言葉の繰り返しと同時に中間部のクライマックスに向けてクレッシェンドする。ピアノの重層的な音が重なり、伝えたい言葉が心に響く。
- ③ 曲の後半では「生きるという」「いのちという」という言葉が何度も語るように歌われ、徐々に弱くしながら、だんだん速度を落とし、消え入るように終わる。同時に男性パートが「ルールー」というドローンな響きで終始歌っているのは命の流れでもあり水の流れでもあるかのようである。

まとめ

ピアノのパートが時を刻むようなリズムで弾き続け、またその響きは、時として何かを訴えるかのように不協和音になり、その上に言葉が語るように、また畳み掛けるように流れていく。谷川の詩は、短いセンテンスで、リズム感があり、心地よい響きがある。その響きは生の営みとして耐えることなく流れている、人の生き様のようにもあり中間部の重々しく重層的な響きへと盛り上がる。それは、喜びでもあり、また苦しみ、悲しみでもある様に聞こえる。しかし、生きるということの重みは自分で変えることのできない、先祖からの長い魂の繋がりでもあるように、未来へと引き継がれていく。

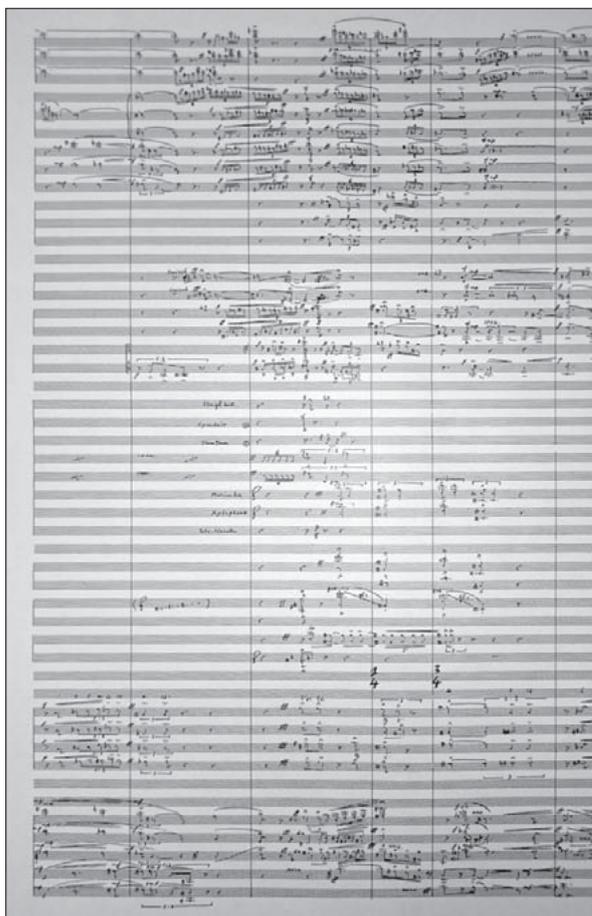
極めてメッセージ性の強い作品だと思われる。

X. 詩人 宗左近について

谷川作品に次いで多いのが、詩人宗左近の作品となっている。

宗左近（そう さこん、1919年－2006年）は、詩人・評論家・仏文学者であり翻訳家。東京大空襲の際、手を離してしまったばかりに母親を眼前で失ったとして罪の意識に駆られた。それからの戦後の時代を必死で生き抜くために、自分自身に叱咤激励して発した「そうさ、こんちくしょう！」という言葉がペンネームの由来。1967年、母を殺してしまった自分への深い断罪の意識に基づく詩集『炎（も）える母』を発表。その後も、戦地に消えた友人達や人々と縄文の人々への想いを交錯させた縄文シリーズとも呼べる一連の詩集を次々に発表する。

「レクイエム」に続く「詩篇」「響紋」は宗左近の詩集「縄文」より作曲した三善の曲で、「詩篇」は混声合唱と管弦楽のために、「響紋」は童声合唱とオーケストラのために書かれた大



譜例2 童声合唱とオーケストラのための「響紋」

オーケストラの使用楽器は打楽器だけでも10種類以上使われている。

作で、「生と死の三部作」として絶賛されたものであった。

これらの曲をCDで聞いた筆者には、あまりに凄まじく鳴り響く打楽器群に死者たちの叫びを、また弦楽器群の緩やかな音の流れには死者の霊の悲しみが、「響紋」の中に聴こえてくるわらべ歌からは、死者への弔いが聞こえてくるようであった。

XI. 三善晃 自作の詩

三善自身も自作の詩により、多くの曲が発表されている。

その中の1曲で、女声合唱曲「あの日から」は教育誌に掲載されたレポートに基づくもので、大人の思いやり、あるいは配慮と真に求められる共感とが必ずしも同じではなく、そのギャップの間で一人の少年がいわば無重力落下してってしまうことを詩とした児童合唱曲である。

三善の、人間の生についての内省的な深い思いからなる詩である。

三善晃 作詩／作曲

「あの日から」

ぼく なんだかだめだ さびしくて ころも
となくって かなしくて その どれでもあつて

ぼく なんだかだめなんだ 太陽も 風も 先生も
ともだちも かあさんもとおくにいて 照ったり 吹いたり 話したり 笑ったり み
つめていたりするだけなんだ

あの日から ぼくの とどかない とおくであ
の日 みっちゃんを死なせたのは ぼくだ
ぼくが さそわなければ
ぼくが 公園であそぼうといわなかったら
あの道をとおってゆこうといわなかったら
みっちゃんは あのトラックに はねられな
かった
みっちゃんを死なせたのは……………

あの日から ぼくのころのなかに
みっちゃんが いる ほほえんで
その さびしそうなほほえみが
ぼくに いったる 強く生きていて と

だから ぼくは 強く行きたいんだ
みっちゃんのほほえみのために
かあさん 先生 ともだち ちかくから みつ
めて
ちかくで 話して ちかくで 笑って
風よ ぼくに ふきつける みっちゃんの い
かりを
太陽よ ぼくにやきつける みっちゃんの く
やしさを
強く生きてゆくために
ぼくが みっちゃんのために みっちゃんにか
わって

あの日から
三善晃 作詩 作曲

Soprano
Alto
Piano

ぼく なんだかだめだ さびしくて
ぼく なんだかだめだ さびしくて

ころもとなくって かなしくて その どれでもあつて
ころもとなくって かなしくて その どれでも その

どれでもなくて ぼく なんだかだめなんだ
どれでも ぼく なんだかだめなんだ

太陽も 風も 先生も ともだちも かあさんもとおくにいて
照ったり 吹いたり 話したり 笑ったり みつめていたりするだけなんだ

この曲は教育出版株式会社の変換による作品である。1981年

譜例3 三善晃作詩「あの日から」の冒頭部分
mpで静かに始まるが途中からf→ff→fffでかなり激しく怒りや悔しさを語るような部分が続く。

XII. おわりに

三善は、学生時代にフランス留学により学んだヨーロッパのアカデミックな音楽理論と、自身の持つ豊かな感性から、緻密で情感にあふれる数々の作品を生み出している。その音楽は言葉で語る以上に、その想いが響きとなって、音に寄り添うように流れ出てくる。そして、詩の響きとなって共鳴している。

戦争体験を通し、人間の生と死を問い続ける三善が伝えたいのは、単に悲惨さではなく、そこから見えてくる様々な人間の姿を詩人の書くテキストを通して私たちに語っているのではないか。

三善の合唱作品には日本語の発音を超えた音響化がなされていて、その響きは開放的になるのではなく、緊張感をもって聴く者に迫ってくる。言葉を音楽に載せるのではなく、音楽からその言葉を聞き取るのだといえる。

合唱（声楽）における言葉と音楽の関係は、言葉は意味の表明であることはもちろんだが、現代では武満徹のボーカリーゼのように母音のみ（アー）の1つの響きで辛辣なまでに現実的に音声として表明していることや、1つ1つの言葉がバラバラな単語として孤立的な音声表現として用いられることもある。

これからも歌い継がれていくであろう三善作品の数々また新たに生まれてくる現代の作曲家作品も含めて、我々合唱を演奏する立場の表現者は、単に音声化するのではなく、作者の深い思いを感じ取るよう、言葉を通して、またその響きから伝わってくるものに、真剣に向き合わねばならないと思うところである。

〔楽譜参考資料〕

- 〈三善 晃〉
 女声合唱のための「三つの叙情」 全音楽譜出版社
 混声合唱と2台のピアノのための「交響詩 海」 カワイ出版
 混声合唱組曲「嫁ぐ娘に」 カワイ出版
 混声合唱組曲「小さな目」 全音楽譜出版社
 混声合唱組曲「子どもの季節」 カワイ出版
 男声合唱のための「王孫不帰」全音楽譜出版社
 こどものための合唱組曲「オデコのこいつ」 全音楽譜出版社
 混声六部合唱、尺八、打楽器、一七絃「変化嘆詠」のための「変化嘆詠」 カワイ出版

- 混声合唱組曲のための「地球へのバラード」 カワイ出版
 混声合唱組曲「クレーの絵本 第1集」 カワイ出版

〔使用楽譜〕

- 譜例1) 混声合唱組曲「木とともに人ともに」 カワイ出版
 譜例2) 童声合唱とオーケストラのための「響紋」 全音楽譜出版社
 譜例3) 合唱曲集「あの日から」 カワイ出版

〔書籍〕

- 「遠方より無へ」三善晃 白水社 2002 p51~p60 p115~p163
 「波のあわいに」三善晃・丘山万里子 春秋社 2006 p65~p96 p139~p163
 「日本の合唱史」戸ノ下達也・横山琢哉 青弓社
 「詩と音楽美の原質」土田貞夫 玉川大学出版部 1976

〔録音資料〕

- 合唱曲演習 CD VICG-40204
 三善晃「合唱の世界Ⅱ」 カメラータトウキョウ 30CM-530
 三善晃「作品集1・嫁ぐ娘に」 ビクターエンタテインメント VICG-60152
 三善晃「レクイエム・詩篇・響紋」 ビクター VDO-1049
 三善晃 混声合唱作品集「生きる」 GVCS 10501